キャンパス・コラム

ゼミ発表会

毎年、中央大学主催で開催される恒例マスコミ懇談会は、いつも百人近いマスコミＯＢの方々で盛会だ。新聞、放送、出版、広告で広くＯＢが活躍されているのを知り、元新聞記者の私も心強く思う。別に「中大閥」などというケチな話ではない。総長、学長以下が母校の現状を報告しマスコミ現役の方に今の中大を知って頂く。これだけでも報道のなかの「中大観」が正確になるからだ。

総合政策学部の「目玉」となっているゼミ発表会も日頃の勉強を企業という、外の目に見てもらうためである。発表会が始まったのは、1995年秋、つまり93年入学の第一期生が三年ゼミに進んだときだ。企業人事担当者を前に、五～七ゼミの学生が各15分づつ発表し、質問も受ける。終了後ビュッフェ懇談会に移り、教えを仰ぐと同時に、各企業の採用方針なども拝聴する。

発表テーマは学生が教師に相談するものの、決めるのはあくまで学生だ。15分の枠内で、どう自分たちの研究、主張を分かりやすく披露するか。その準備は夏休みごろ始まり11月末本番の長丁場となる。なかなか手間がかかり、資料収集、議論をもとにしたナレーション原稿の絶えない手直し、寸劇の演技振付など直前までもめ抜く。研究室や情報処理室での徹夜も珍しくない。学部リハーサルも三回はやる。準備のなかでゼミ仲間の繋がりも固くなる。

お客が企業のせいか、発表内容は企業・行政問題がらみが多い、つまり政策科学科のゼミが主力となりがちだ。文化、語学系ー国際政策文化科ゼミの参加をもっと増やしていくのが課題だろう。

課題といえば対外発表の前に、あるいは並行して、学部内のゼミ発表が必要かも知れない。同じ学部でも、けっこう「隣はなにをする人ぞ」なのだ。学生間の励みになるし、なにより夜郎自大の弊を避ける利が大きいと思う。それがうまくいけば、次は全学部のゼミ発表会……と勝手に考えている。

広報委員　木村　晃三（総合政策学部教授）

編集後記

「20世紀最後の・・・」という言葉は既に言い尽くされてしまったような気さえするほど、時代は新世紀へ目を向けて進んでいる。そのなかで「21世紀に中央大学を日本一の私立大学にしたい」という夢を語り続けた総長の高木友之助先生がご逝去された。ご冥福を心よりお祈りしたい▼一つの時代が終わったと言えるのかもしれない。しかし、時代が変わっても、毎年桜広場の桜は素晴らしい花びらをつけ、今日の入学式には新しい世紀に胸を膨らませる若者達が目を輝かせながら新たな気持ちで中央大学の門をくぐっている▼若者達は、この大学でどんな夢を実現しようとしているのであろうか。時代が大きく変わろうとしていることを若者特有の感性で敏感に受け取り、次の素晴らしい時代を創っていって欲しいものである▼自分の夢をみつけ、その実現に向けて全力を尽くすことこそ、大学生活を充実させる唯一の方法なのだから。そして、これこそ高木先生が求めてやまなかった「夢」の実現へ繋がるのではないだろうか。

（広報課）

Hakumon ちゅうおう

2000・4月号（第156号）
2000年（平成12年）4月1日発行

発　行　　中央大学広報委員会
〒192-0393 東京都八王子市東中野742-1

〈編集担当〉広報課　☎0426－74－2146
印　刷　泰成印刷株式会社
〒130-0026 東京都墨田区両国3-1-12
電　話　03-3631-8141